

研究動向

日本における李喬文学受容の三つのフェーズとこれからの展開

三木 直大

はじめに

第1節 政治というフェーズ

第2節 文学というフェーズ

第3節 学術というフェーズ

おわりに

(要約)

昨年は台湾で『李喬全集』全45冊(客家委員会)の刊行がはじまり、「2022 李喬文學、文化與族群論述国際学術研討會」(清華大学)も開催された。前者には明田川聡士が編集に加わり、後者には明田川と筆者も参加した。それにあわせ、日本での李喬文学受容の動向について、1985年の短編「小説」の翻訳から今日に至るまでを通時的に整理し、今後の展開を考えてみたい。

はじめに

日本における李喬文学受容は、台湾での研究の深化や展開にはもちろん及ぶべくもないが、1980年代、2000年代、そして現在と、三つのフェーズがある。それぞれを特徴づけるキーワードを、かりに政治、文学、学術としてみよう。文学研究にこの三つはもとより切り離せないものだが、なにが上位にくるかは時代と不可分である。その時代とは台湾の時代であり、日本の時代であり、台湾と日本の関係性のなかの時代である。さらに翻訳文学の市民読者層へのひろがりや、外国文学のカルチャー化という四つ目のフェーズとするなら、今日では台湾中国語文学にもそんな場所で読まれる作品が登場するようになった。出版には資金面で台湾政府の文化戦略とも関りがあるにせよ、カルチャー化は翻訳文学としての台湾文学作品が、ようやく採算のとれる本として日本の消費される文化の場に浸透してきたということである。

しかし残念ながら、李喬文学はそこへまで読者層をひろげることはできていない。李喬作品も振り返ってみると、2005年に『寒夜』(国書刊行会)の翻訳が出たとき、その可能性はあった。『絶対音感』がベストセラーとなり次々とヒット作を発表していた最相葉月による書評が、『朝日新聞』(2006年2月19日朝刊)に掲載された。最相の曾祖父も祖父も台湾総督府の官吏だった人物で、書評は植民地統治への反省とともに祖父の記憶から始められていた。今日のように東京台湾文化センターがあり市民開放型の活動をおこなっていて、日本人作家との対談や公共電視制作の連続ドラマ化版(2002～2004)上映などが実現していれば、台湾に縁や関心を持つ市民層を呼び起こし、『寒夜』はベストセラーになっていたかもしれない。しかし当時は、「新しい台湾の文学」シリーズがなかなか売れず、出版社も在庫の山を危惧する状態だった。『寒夜』は品切れにはなったが、いまま増刷はされないままである。

第1節 政治というフェーズ

日本でいちばん最初の李喬作品翻訳は「小説」(『文学界』創刊号、1982.1)で、『台湾現代小説選Ⅲ三本足の馬』(研文出版、1985)に松永正義訳で収録されている。80年代中期に出版された、この最初の系統的な台湾中国語文学翻訳シリーズ『台湾現代小説選』の3冊が、日本における戦後台湾中国語文学研究の土台を作ったといってもおかしくはない(4冊目の『鳥になった男』は98年、別巻の『デイゴ燃ゆ』は91年)。主たる翻訳者は戴国輝主宰の研究会に端を発する台湾近現代史研究会の、若林正丈を中心とした戦後生まれ第一世代の台湾研究者である。またこの3冊は、解説類も翻訳収録した台湾版が1986年に名流出版から出ている。台湾が民主化にすすむ時代のなかで、日本の台湾文学研究が台湾でのそれと並走していく同時代的な高揚感のようなものを、そこに見出すこともできるだろう。

政治のフェーズというのは、台湾文学を定義問題とあわせて持ち出さないといけない時代だったということでもある。『I 彩鳳の夢』には松永正義による「台湾文学の歴史と個性」という植民地期からの「台湾」と「台湾文学」についての「解説」、『II 終戦の賠償』には陳正醒訳で壹闡提(李喬)「『台湾文学』を考える」(原著は「我看『台湾文学』」、81.7)と「八〇年代の台湾文学」と題した松永による統編の「解説」が収録されている。そこに80年代中期の日本にはまだ、「台湾文学」という用語に今日のような認知がなかったこと、そしてこのシリーズ企画者の「台湾文学」を日本に流通させようとする姿勢がよくあらわれている。また『III 三本足の馬』には、若林による「語られはじめた現代史の沃野」が収録されている。発表とほとんど同時に葉石濤によって訳された(1985年9月の『台湾文藝』第96期など)この解説は、南部のT市でY氏に会ったことに始まり、その翌日に新聞で林義雄事件を知ったことで閉じられている。そして「小説」については、「寒夜三部曲」(発表は1978年～1981年)の第2部『荒村』での「あの年」の事件(大湖竹南事件だろうとしている)と「小説」における「あの年」との同一の人物設定、そして「この年」(二二八事件)への「延伸」について論じ、陳映真「山道」との対比も念頭にいたうえで、李喬文学が描きだす重層的な「圧迫(弾圧)の構造」の「高い象徴性」を強調する。「日本統治下の共産主義運動」という描かれなかったものへの若林ならではの指摘も含め、若林は李喬の小説を台湾の様々な歴史的事件の深い意味での再現として読んでいて、それが「現代史の沃野」ということである。そこには台湾史の過酷のなかに近現代史研究が探求すべき多くの課題が埋まっているといった含意がある。もちろん李喬作品の高い文学性も強調されていて、「小説」が80年代台湾においてきわめて時代批判的かつ前衛的な作品であることがよくわかる。また第3部『孤灯』が既発表短編小説の「集大成」なのに対し、「小説」は第2部『荒村』からの発展という読み方も示している。「寒夜三部曲」と「小説」へのカミュからの影響も、謝松山「簡介『寒夜三部曲』」(『文学界』4期、1982)を引用するかたちで、「ベスト」の舞台のオラン市と李喬作品における「島」の歴史の近似性を指摘していて、「寒夜三部曲」を読むための手掛かりが的確に指摘されている。ここには若林の植民地期抗日運動研究の視点、同時代台湾の政治状況分析、そして東アジアの政治学的地勢図への台湾政治史研究者としての課題が重なっている。さらに「台湾

問題」への日本の政治的責任というテーマが、作品をどう読むかの根底におかれている。こうしたことが政治というフェーズとした意味合いでもある。

それは研究の政治学とでもいったものとも不可分である。松永正義も「日本における台湾文学の研究について」（『言語文化』Vol.30、1993）で書いているが、言い換えれば日本の「台湾研究」は、戦後日本の「中国研究」のありかたと反比例していたということである。戦後の中国研究は単純化するなら、日本近代の中国侵攻への理念的な「贖罪」意識と「革命中国」の「神話」のようなものによって縛られていた。いわば中国の研究＝正統、台湾の研究＝異端といった構図になっていた。たしかに竹内好の「中国の会」には台湾への視線はあったし、尾崎秀樹の『近代文学の傷痕』（普通社、1963）もあった。その発展形としての『旧植民地文学の研究』（勁草書房、1971）は、植民地支配への反省が置き去りにされていた時代のなかでの先駆的な仕事だが、あくまで「植民地文学研究」である。1969年の雑誌『中国』での呉濁流「無花果」の連載も同じで、戦後台湾中国語文学への視線ではなかった。

それに対して、台湾近現代史研究会の若手研究者たちの台湾研究への取り組みには、そうした戦後日本の中国研究との緊張感があった。この時期は若林が『世界』や『中国研究月報』に台湾に関する論説を書き始める時期でもある。そうしたことが李喬文学のとらえ方、そして『台湾現代小説選』という仕事にも反映している。それは『三本足の馬』で陳映真「山道」を訳した岡崎郁子の「台湾郷土文学の香—李喬」（『津田塾大学紀要』、1987）も同様である。岡崎論文には表題からもわかるように、「政治小説」という観点ではない方向で李喬文学を読もうとする姿勢があり、前半部では李喬に会ったときの印象を中心に作家の人間像と作品世界を全体的に描き出そうとしていた。しかし後半は陳映真の「第三世界文学論」と李喬の「台湾文学土着化論」とを対比的に論じる内容にかわり、たしかに80年代中期の文学状況はうかびあがるが、作品分析が族群政治論のようになっていった。もちろんそれは、この論文を後半部のみ収録する岡崎の『台湾文学—異端の系譜』（1996）という書名が示すように、正統と異端の、その異端のなかの正統と異端という構造に、岡崎の視線が向けられていたからでもある。そのほか李喬の論説では、台湾独立建国聯盟の『台湾青年』No.348（89.10.5）に戴國輝『台湾』（岩波新書、1988）への書評があり、戴の二二八事件観への批判と李喬の視点の提示が中心だが、松永と若林の仕事に高い評価がされている。また、同じく『台湾青年』No.353（90.3.5）に「醜い台湾人」の掲載がある。前者は台湾の「民衆日報」発表記事の彭雙松訳、後者は評論集『台灣人的醜陋面』（前衛、1988）の鴻星洋による部分訳である。

「小説」の次に李喬文学の翻訳が登場するのは、90年代前半である。共に下村作次郎訳で『バナナポート：台湾文学への招待』（JICC、1991）に「密告者（告密者）」（1982）、『悲情の山地』（田畑書店、1992）に「パスタアイ考（巴斯達矮考）」（1977）が収録されている。『悲情の山地』は呉錦発編集で、この翻訳は台湾文学研究では植民地期研究から出発した下村が原住民文学の研究と翻訳を開始する転換期のものである。『バナナポート』は「発見と冒険の中国文学」全8冊の1冊で、訳者は他に澤井律之や野間信幸など『啞啞』（台湾文学研究会）に集まった関西の戦後生まれの台湾文学研究第一世代である。作品選定は監修の山口守との共同作業だったようだが、

「密告者」は李喬短編のなかでも「小説」と同系列の作品である。この時期は80年代初頭からの中華人民共和国の開放改革路線の中で盛りあがりをもせていた中国現代文学研究に天安門事件を契機に相対化が生じ、中国語現代文学研究へ、さらに台湾文学研究との分化へと移行していく転換期にあたる。このシリーズはそうした変化を象徴していて、前衛出版社版「台湾作家全集」の出版が始まる時期とも重なっていた。また1992年には中華人民共和国でも、『台湾当代小説精選1945－1990』全4冊が、北京の三聯書店から出版された。台湾外省人の詩人・編集者の郭楓主編で、中国の出版物としては今日では考えられないほど作品選定の自由度が高かった。第1冊には鄭清文の「序文」があり、李喬では「人球」「小説」「泰姆山記」「山女」が収録されている。次いで92年から93年には、やはり郭楓主編で「台湾当代名家作品精選集」全13冊が人民文学出版社から刊行された。作家では白先勇や王文興、詩人では陳千武らと並んで、李喬『情天無恨』(1983)もその1冊だった。この出版は、日本の中国語現代文学研究者がひろく戦後台湾文学のエポックを知る契機にもなった。こうした事情については、先述の松永のもののほか、下村の「日本における台湾文学研究」(『天理大学学報』169、1992)が当事者としてまとめている。

それから1995年から1999年にかけて、雑誌『発言者』での若林正文翻訳による李喬「台湾からの手紙」の長期連載(不定期全19回)がある。李喬は小説創作だけでなく政治文化論的な著作も多い作家で、2022年国際シンポジウムでの李舒中「李喬文化論述の初歩分析」によると、この連載は台湾でも『自立晩報』にほぼ同時並行で発表されている。内容は①『「台日恩讐記」：日本はどこに隠れようと言うのか』に始まり、⑧「中国を凝視する：台湾人の台湾」、⑩「李登輝を論ず：愛・恨み・憎しみ・期待を一身に集める人物」、⑫「台湾の『ポスト・モダン』」など、1990年代台湾民主化運動の時代のなかでの様々な政治、社会、文化事象について、辛辣な批判精神にもとづく幅広いもので、東アジアの政治的地勢図への視座の下に、提言を含め台湾論、日本論、中国論を展開している。今日でも有効な、台湾論にとどまらない東アジア論として、特筆しておいてよいものである。『発言者』は西部邁が創刊編集のオピニオン誌で、1994年4月から2005年3月まで発行された。「保守論壇」という性格の雑誌だったからか、筆者もだが台湾文学研究者の間でもほとんど知られていなかったと思う。掲載に至る詳細は未詳だが、『発言者』だからこそ可能になった連載であったろう。

第2節 文学というフェーズ

1999年から2008年にかけて国書刊行会から、「新しい台湾の文学」全12冊が出版される。このシリーズの登場は『バナナポート』を引き継ぎ、日本の中国現代文学研究の相対化と不可分なものである。しかも15年前の研文出版版『台湾現代小説選』とは違い、白先勇『孽子』、李昂『自伝の小説』、朱天心『古都』などの長編小説を含むところから、台湾現代文学をいっきに日本の同時代海外文学化させた。編集委員は藤井省三、山口守、黄英哲で、台湾政府文化部(文化建設委員会)の助成金による最初の出版物である。それが誤解を生じさせたこともあったようだが、この助成金がなければとても出版できなかったろうし、日本の読書界への台湾文学の認知はもっ

と遅れていたかもしれない。翻訳者は大半が大学に籍を置いていて、そうでなければできない、無償にちかい仕事だった。その1冊に『客家の女たち』（松浦恆雄監訳、2002）があり、李喬は「山の女（山女）」（1969）と「母親（母親的画像）」（1994）が三木訳で収録されている。同書は彭瑞金の編集と解説で、「客家文学」というだけでなく、女性が主人公の作品を並べる工夫があった。「母親」と「山の女」は郷土文学色のつよい作品で、実験小説としても読める「小説」や「密告者」に比べると、その文体もかなり異なった作品である。「訳者後記」では「李喬ワールド」の登場人物たちという言葉を使い、「母親」に登場する「阿妹おじ」は『寒夜』にも登場する」としている。ただ「母親的画像」は、訳題を「母親」ではなく「母親の肖像」としたほうがよかったろう。必ずしもこの2編はリアリズムの文体というわけではなく、題名も「画像」がついているところに作家の仕掛けがあるからである。同時期には、この出版にあわせたかのように『アジア文化』第25号（アジア文化総合研究所、2002）に特集「台湾の客家文芸」が生まれ、李喬の『寒夜』にみる台湾客家先民の開拓魂」が青流（不詳）訳で掲載されている。続いて『植民地文化研究』第3号（2004）に、三木訳で「阿妹伯」（1962）がある。台北城守備兵で苗栗に流れ着いた人物をモデルにし、定型的な「族群」アイデンティティを超えたところで李喬が阿妹伯の造型をおこなっていること、そして同じモデルから派生して「寒夜」では邱梅という名で登場する人物との設定の違いを作品論的にどう考えるかといった内容の「解説」を付けている。政治のフェーズの流れを引き継いでいるのだが、若林の論を補って実験小説的作品と区別するために「蕃仔林ワールド」というキーワードを設定し、郷土文学的短編が「寒夜三部曲」の準備作業にもなっているという、おおまかな見取り図を提示している。そのほか三木には、短編小説群の登場人物設定を「寒夜三部曲」の父の死・不在の父・代理の父・大地の母という物語構築と関連付けた「李喬《寒夜三部曲》和台湾想像」（『台湾想像與現実（Taiwan Imagined and Its Reality）：文學、歴史與文化探索』、UCSB、2004）もある。

そして、岡崎郁子と三木共訳の『寒夜』（2005）である。「小説」の翻訳から20年たっている。ただ、国書刊行会版は「三部曲」のすべてではなく、第1部『寒夜』と第3部『孤灯』だけで、第2部『荒村』は含まれていない。しかも翻訳は英訳版のために齊邦媛が作成した簡約版『大地之母』（2001）がテキストである。担当は「寒夜」部分が岡崎、「孤灯」部分が三木である。「解説」では作品における多言語記述処理の問題を扱うほか、「荒村」の簡単な紹介、簡約版ではカットされた明基の恋人である阿華のマニラでの爆死シーン（自死）の補足的翻訳などがあり、作品の舞台の地図や主人公一家の家系図なども付している。新聞書評では、「阿漢との間に10人の子供をもうけた、僅かばかりだったが土地を手に入れた灯妹は、ある意味で自己決定権をもたなかった『台湾』の一つの独立の形を象徴しているのかもしれない」とする与那覇恵子の『東京新聞』（2006年2月26日）書評もあった。

『寒夜』の翻訳出版後の三木に「試論『孤燈』—李喬小説的歴史叙述與文学虚構」（『台湾大河小説家作品学術研討会論文集』、国家台湾文学館、2006）と、これをベースにした「李喬『寒夜』と饒舌体の語り」（山田敬三編『南腔北調論集：中国文化の伝統と現代』、汲古、2007）がある。李喬という作家は巧みなストーリーテラーでもある。苗栗の山間部に入植した貧しい客家人の一

家を主人公とする物語構築と相俟って、「寒夜三部曲」ではそれが際立っている。この2編はその仕組みを捉えようとしたもので、前者は読者によって読み直され／書き直される蕃仔林ワールドの登場人物たちという読者論的構造を想定し、それを「大衆性」と読み替え、そこから「寒夜三部曲」をきたるべき「国民文学」としての「大河小説」として、80年前後期のなかでの役割を考えている。後者は李喬によって作品に設定された非人称の「語り手」の「語り」の操作を「意識の流れ」的なものを含む「饒舌体の語り」と名付け、それを「三部曲」の物語書写の方法として読み解こうとしている。ともに大岡昇平の『歴史小説論』（岩波、1990。初版は『歴史小説の問題』、文藝春秋、1974）における歴史記憶の表象論（記録としての『レイテ戦記』と小説としての『野火』の役割分担など）と、尾崎秀樹の『大衆文学論』（勁草、1965）が援用するグラムシの「大衆文学論」（1934、日本語版『グラムシ選集3』、合同出版社）における「民族的―大衆的」という論点が参照され、そこに四方田犬彦が『アジア映画の大衆的想像力』（青土社 2003）で論じる「大衆的想像力」というテーマを重ねた内容になっている。さらに三木はそうした物語構築を「現代性」と「郷土性」という台湾文学的なテーマを中心にまとめなおし、「李喬文学中の現代性・郷土性・大衆性」（台湾師範大学、『李喬の文学與文化論述（上）』、2007）を発表している。今日からはいまさらの感があるが、「現代性」と「郷土性」は「現代文学」と「郷土文学」というカテゴリーに回収されるものでなく相互に矛盾しないこと、単純化すれば「現代主義」の方法で「郷土」を描く事例として李喬作品をとらえようとしている。そして「寒夜三部曲」が中華民国台湾化路線下で「抗日表象」として受容されるだけでなく、民主化に向かう時代のなかでの台湾像の構築（「台湾想像」と不可分なことで「大衆性」とも矛盾しないこと、つまり時代と並走していることを論じ、さらにそれを作中登場人物の造型を通しての物語の「神話化」として説明している。また『孤灯』に一か所登場する「食人」のテーマの扱いについては「野火」（1952）と対比し、李喬のめざす物語構築との並列の難しさを作品論の問題として取りあげている。とはいえこれらの論述は、「族群」の差異化と脱構築と再構築の連鎖に触れてはいるにせよ、いかにも限定的で不十分な内容である。なにより問題は、1920年代の台湾文化協会と台湾農民組合の運動を背景に主人公一家の悲劇を描く第2部『荒村』が未訳なうえに作品論も欠いていることで、これでは『大地之母』論だと言えなくもない。

「寒夜三部曲」における歴史叙述については、三木が台湾史研究の周婉窈の援助をえて、苗栗で李喬にインタビューした『『寒夜』の背景』（『植民地文化研究』第5号、2006。台湾では『文学台湾』2007年春季号）がある。「志願（兵）」と「徴兵」の同一視や開戦日時の表記、日本軍の編成、出征のたすきが『孤灯』では「赤」であることなど、歴史事象の扱いや誤記などについての指摘が戦争体験をもつ日本人読者からあったのを受けたもので、この鼎談では主に「歴史事実と虚構」をテーマにして歴史記憶の表象についてと、「寒夜三部曲」は「歴史小説」ではなく「歴史素材小説」であるとする李喬の歴史小説論が議論されている。

岡崎郁子は『寒夜』の翻訳作業を契機に、「李喬『寒夜三部曲』における日本語表現法及びその時代性」（『吉備国際大学研究紀要』、2008）を発表している。台湾文学における日本語の役割というテーマは、岡崎のライフワークである黄靈芝論の構想とも不可分のものである。岡崎論文

はつねに作家における書写言語の扱いとその方法的、思想的態度から作品を考えていくもので、そこから台湾文学の特殊性と歴史性に視点が拡大されている。そのこともあわせ、『寒夜』翻訳出版時期に共通するのは文学というフェーズからのものと言ってみたい。そのほか、李喬は2009年の植民地文化学会大会にゲスト参加し、「台湾における『特殊後植民情境』の文化現象」という日本語講演をしている。これは若林正文の訳に拠るもので、『植民地文化研究』第9号(2010)に収録されている。馬英九總統を生み出した政治・文化の状況を歴史的な文脈のなかに批判的に位置付け、李喬の考える台湾のあるべき姿を問う内容で、「台湾からの手紙」とも通じている。このときに李喬は逝去した葉石濤のあとを受け、学会の顧問に就いている。また第10号に鄭清文の「鋼鉄ワイヤロープの高度：李喬文学の達成」、第17号に李喬「追悼・鄭清文：親しき友よ、良き旅路を」（共に三木訳）がある。

第3節 学術というフェーズ

『寒夜』翻訳からほぼ10年たって、明田川聡士と三木の共訳『曠野にひとり』（研文出版、2014）がある。書名は『飄然曠野』（1965）に拠る。澤井律之・中島利郎編集の「台湾郷土文学選集」全5冊（国立台湾文学館出版助成）の1冊で、「台湾文学」ではなく「郷土文学」というタームにもういちどスポットライトをあてておきたいとする編集方針によっていた。このときの翻訳は、同時代文学を訳すというより、文学史的に李喬作品を考えるという発想がよかった。それは日本の外国語文学としての台湾文学受容が、不十分ながらも一定程度の蓄積をもってきたことのあらわれでもある。翻訳作品も書名も訳者に任されていて、『李喬短編小説精選集』（聯経、2000）などを参照しながら、『李喬短編小説全集』全10冊（苗栗縣立文化中心、1999～2000、別冊1冊）をテキストにして、できるだけ李喬短編小説世界の多様性を示すことを目標に訳者二人で案をつくり、作家とも相談して10篇を選んでいる。李白を主人公にした武俠小説「慈悲の剣」（1983）を選んでいるのは、李白非漢人説が背景なこととあわせ李喬作品の多様性の一例としてだが、山口守が書評（『植民地文化研究』第14号、2015）で指摘するように、呂赫若の死を題材にした「泰姆山記」（1984）を入れるべきだったかもしれない。また、三木が「作家について」で概説的な紹介を書き、明田川が「作品について」で収録作品を概観している。明田川の「解説」は、明田川が論文として展開していく李喬論の中心になる論点のほぼすべてを含んだものである。

その次が、明田川聡士翻訳の『藍彩霞の春』（未知谷、2018）で、行政院客家委員会企画の「客家文学的珠玉」全4冊の1冊である。できることなら若林が「寒夜三部曲」に継ぐ第四曲とも位置づける『埋冤一九四七埋冤』（海洋台湾出版社、1995）がよかったが、客家委員会によるこの選定自体はわるくはない。単行本出版は1985年だが初出はそれよりも少し早く、李昂「殺夫」（1983）の発表とほぼ同時期である。台湾社会の女性と性産業の問題を取りあげ、殺人を犯した娼婦を主人公にした『藍彩霞の春』は台湾の80年代という時代の中でのセックスとセクシュアリティとジェンダーの問題に踏み込んだ小説で、李喬が「寒夜三部曲」とは違う長編小説の方法的展開を試みた作品でもあった。李喬は『寒夜』翻訳時に筆者への手紙で、『孤灯』のヒロイン

阿華について自分は女性を描くのが下手だと述べたことがある。しかし「寒夜三部曲」を貫くヒロインは灯妹だし、実際に李喬には女性を描いた作品は多くある。ただ灯妹にせよ、それはきわめて理想化（つまり「画像」化）された女性像で、理想の台湾の隠喩のような役割を割り振られていた。だが阿華は灯妹とは違い、そうした隠喩的な役割を担って生きることでできない女性として登場する。それは作家にとってリアルな存在としての女性ということでもある。そして阿華と藍彩霞の苛烈な人物造型には、共通点のようなものがある。そこからすると藍彩霞の構築は、同じく娼婦をテーマにしている、たとえば黄春明の「看海的日子」（1967）のヒロイン白梅とは大きな違いがある。『藍彩霞の春』の李喬的リアリズムの文体による物語構築には、後述する明田川の研究が指摘するように、同時期の「小説」と並んで李喬独自の「実存主義」（欧米文学の同時代的な受容としての戦後台湾文学における「現代主義」の一形態ともいえる）的人間観が色濃く表現されている。ともあれここまでが、現時点までの日本における李喬文学の翻訳史になる。

受容史とはしたが、白先勇と並び立つ作家にもかかわらず、日本での李喬研究は少ない。そんななかで昨年、李喬論5編を収録した明田川聡士『戦後台湾の文学と歴史・社会：客家人作家・李喬の挑戦と二十一世紀台湾文学』（関西学院大学出版会）が出た。既発表論文の集成だが、明田川の李喬論は若林の議論に何を付け加えうるかがおおきな課題になっていて、作品発表時期の文化状況や関連作品・資料の広範な調査と分析を手掛かりに（それが明田川のいう「歴史・社会」の具体的な中身にもなる）、李喬作品を読むあらたな視点を探っていく。たとえば第2章「李喬『埋冤一九四七埋冤』における孤児意識からの脱却」は、二二八事件を題材とした先行作品の限界などを整理しながら、「上巻」の歴史記録と「下巻」の物語構築という二部構成の役割設定を考察したうえで、「台湾人女性が中国人兵士に強姦されて産み落とした私生児」である「浦実」（怨み）の、李喬によって描き出される「存在（実存）」の苦闘と、戦後直後の「台湾人」の「苦闘」の現在に及ぶ射程を提示し、二二八という「歴史的事件の深い意味での再現」として作品を読み解いている。また第4章「李喬『小説』と台湾文学界における安部公房の受容」は、日本語世代の作家たちが日本語訳を媒介に欧米の同時代文学を受容したことや、作品発表当時のインタビュー記事などから鍾肇政翻訳の安部公房『砂の女』をヒントに李喬が白色恐怖下の台湾を描く方法を探求した可能性を論じている。「実存主義運動」という用語の設定や具体的な作品構造の比較分析に課題は残るが、その視点は日本語という言語の道具化と白色恐怖下におけるコロニアルの転倒を考える王恵珍『訳者再現：台湾作家在東亜跨語越境的翻訳実践』（聯経、2020）とも響きあい、「人球」や「小説」の読み方にあらたな展開を期待させる。それは第3章で論じられるフォークナー作品からの影響分析も同じである。また「ヨクナパトファー・サーガ」をアメリカ南部のいわば「郷土文学」ととらえ、李喬世界とのベクトルの違いを指摘する論述は成功している。第1章では「官製文学」ともみなされ重要視されてこなかった『結義西来庵』（1977）を取りあげ、「寒夜三部曲」に展開していく李喬歴史小説の開端的作品として文学史的に再評価していて意味がある。そして第5章は戦後台湾文学における「戦争」の記憶と表象に焦点をあてて、「蕃仔林ワールド」の短編から『孤灯』までを再読するもので、丸川哲史「戦後台湾における戦争文学の形成」（2011）

なども参照しつつ、大岡昇平作品の影響を詳論している。明田川の登場で日本の李喬研究はおおきな進歩をみせたが、歴史長編小説の経時的な分析や「客家文学」としての考察が課題だし、『荒村』に焦点をあてた作品論ものぞまれる。

おわりに

李喬は2000年代に創作を停滞させるが、メタフィクション的要素をもつ『重逢——夢裡の人：李喬短編小説後傳』（2005）が契機となったのだろう、2010年代に入ると続々と長編小説を発表する。「幽情三部曲」（2010～2013）に関しては、『咒之環』（2010）だけでも論じておく必要があるだろう。「『私』とは何か？『私』とは誰か？」の問いで始まる『咒之環』は台湾人を「グラーグ」（李永熾「序」）の住民ととらえ、その呪いの連鎖にどう向き合うかを探る物語でもある。「台湾からの手紙⑩自縄自縛の中国と同盟すべきアジア」（『発言者』64、1999）に登場させた「アジア・中華平和フォーラム」を、5人の若いアジア人を主人公に構想する『亞洲物語』（2017）は、作品としての成否はともかく、冷戦体制崩壊下で強権政治のグローバリズムと結びついた今日の資本主義とあらたなコロニアリズムへの強い批判の視座からの「台湾像」の再構築の試みだった。2022年の国際シンポジウムでは「身体」「性愛」「魔神仔」からのテーマ分析をはじめ、「後植民書写」として李喬文学を読み直し「現在化」を試みる発表もあった。李喬が時代と並走し続ける作家であり、いまでも私たちの同時代作家であることを示すためにも、また日本における李喬文学受容のあらたな展開のためにも課題は多い。